

## 姉妹校HIESの生徒と読む中島敦『山月記』

7月11日(月)3校時、HIESの生徒9名と、本校2年次32名で『山月記』(講座 現代文-1)の授業を行った。同様の試みは平成17(2005)年度「姉妹校HIESの生徒と読む芥川龍之介『羅生門』」以来二度目である。日本における現代文の定番教材を、アメリカの姉妹校の生徒はどう読むのか知りたいというのがその発端だった。



授業者は国語科細田、英語科庄末、ALT ジェニファー・コッツインの3人。構成は3人で前もって考え、当日は細田が主にしゃべり、庄末、ジェニファーに通訳及び助手の役割を果たしてもらった。

導入として全体に5つの質問(1 この小説が好きか、2 李徴という人物に共感できるか、3 高校の時の同級生。一方がその後人生で大成功し、一方は大失敗をして困窮の内に暮らしている。この二人の間に友情は成立するか、4 遠彦は帰り道にまたこの道を通ったと思うか、5 自分が変身するとしたらどの動物がいいか。)を行い、次いで項目別に日米双方から感想・意見を述べ合い、最後に「月」のイメージ・シンボルについても発表し合った。

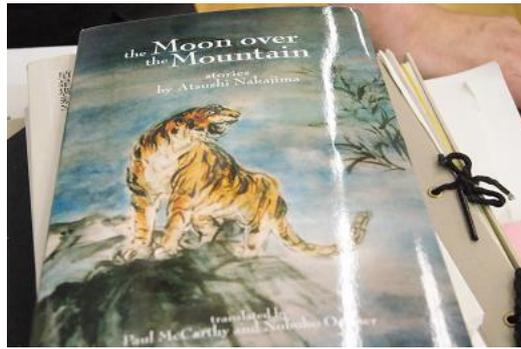
この小説の印象については、「好きだ」と答えたHIESの生徒は6/9、本校生徒は9/32。「好きか」という聞き方に少々問題があったように思うが、概ねHIESの生徒の方が好印象を持ったようだ。以下、授業を終えた本校生徒の感想の一部を掲載する。

「感性の違いも感じられたし、反面意外と同じような感覚なのだと感じた点も多かった。」「李徴に共感する人が多かったのには驚いた。」「日本でもアメリカでも、高校生は友情をととても大事なものだと考えていることが再確認できた。」「9人しかいないのに、一人ひとりの考えが全く違い、とてもおもしろかった。」「ハトや月の色=白から平和を連想するというのがあったが、戦争が自分と無縁ではない国に暮らしている高校生ならではの発言だと感じた。」「うまく言えない時にもみんながアドバイスし合ったりしていたし、授業に取り組む姿勢がとても真剣で、積極的だったのが印象に残っている。」「今度はアメリカの小説で感想を交換してみたいと思った(同様の提案は授業後、HIESのキャシー・ドーレン先生からもなされた)。」「異文化の人と議論するのは非常におもしろく、貴重な体験ができてよかった。」「初対面だというのにHIESの人たちはとても積極的で、もっと一緒に話し合いがしたいと思った。」「ぜひ他の小説でもやってみようと思った。」「アメリカ人原作の本を読んだことがなかったが、ぜひ読んでみようと思った。」「月(特に三日月)から具体的に連想されるのが、男性の顔だけというのには驚いた。」



なお、本授業を実施するにあたっては「JLPP」(2002年に文化庁が現代日本文学の海外への発信・普及を推進するために立ち上げたプロジェクト。発足以来、明治以降に発表された現代日本文学作品のなかから専門家による会議において候補作品を選定し、それをさまざまな言語に翻訳し、出版する活動を進めている。)より多大の恩恵を賜りました。

(文責; 国語科 細田)



## 資料；『山月記』感想文

### HIESの生徒 9名

注 ・事前に e-mail で『The Moon over the Mountain』(translated by Paul McCarthy and Nobuko Ochner)の本文を送っておき、感想を返してもらった。

- ・項目は本校教諭庄末（英語科）が指定したもの。もと HIES の生徒名前入り。
- ・本校生徒はこの感想を前もって見てはいない。
- ・本授業に参加できなかった他の講座の本校生徒には、後日配布した。

#### 李徴について

1. トラに変身したことが二人を分かち、旧交を深めることができないとしても、二人がまた再び友人であったことが非常に興味深いことである。李徴が自らの能力を最大に活かすことが2度とできないことは悲しいことだ。神に与えられた才能を伸ばし、世に知らしめるべきときに、それを浪費してしまった。その臆病な気持ちがあれば、私たちは虎に変わってしまうことがあるのだ。
2. 両名とも同じ特徴を持っている。李徴は多くのことを願い、詩人になることを急ぎ過ぎた。
3. 李徴という男は、人の願望と貪欲を象徴している。李徴が持つ貪欲さは、自らの才能を認めてもらいたいという欲である。彼が名声欲を抑えることができないときには、夫と父としての義務を忘れてしまう。この貪欲さは、彼がくだらないと信じる公職を侮蔑するときに、再び表出する。こうして、彼の貪欲さは彼をとりこにし、獣への変身をもたらす。この変身は、人の行動が貪欲さと利己的な願望によって圧倒されるとき、その行動はどれほど獣のごときものになるかを示している。また、李徴の詩が第一流となるには欠けるところがある事実が、いかに貪欲さが人の潜在能力を発揮することを妨げるかを示している。
4. 両キャラクターは正反対である。遠修は、李徴がもし努力せずに、秀でることを望まなかったら、彼がなりえたであろう姿だ。遠修は李徴がなりえた人物像の良い面を表出している。李徴は高官になるために働くことを望まず、職を棄て、努力しなかったので、詩家として名を残すこともできず、その道も棄てた。遠修は彼の仕事をやめることなく、秀でることができた。
5. 二人の人物は、人生で起こりうることと、それが自らと他人に、いかに影響を及ぼすのかについてのすばらしい例である。李徴は詩歌に才能があり、名をはせたいという強い思いで、人生で家族・妻といった大切なものを見失ってしまった。もし戻れば狂気が再発することを知っていたので、賢明だ。
6. 李徴はとて心にも葛藤がある人物だ。結局彼を破滅に導いた彼の最大の欠点は彼の完璧を求める衝動だ。彼には過ちを認めるゆとりがない。しかし、彼は思いやりや謙虚さを犠牲にして、自らを最高の水準に押し上げようとした。私もまた、この終わりのないレースに取り組んでいる一人だ(私も完べき主義者だ)。筆者は李徴の虎への変身で、私達も狂気のふちにいることを警告している。人は李徴のように、力、富、成功に満足を決してしない人間が好きだ。このため、人は人生で幸せには決してなれないのだ。
7. 李徴は21世紀の私たち若者にとっても良く似ている。彼とは違い、私達はプライドをわき追いやることを学ぶべきだ。思い上がりの気持ちを持たないで、成功への階段を登るよう努力すべきだ。人生に失望し、怖れや恥そしてプライドが私達を虜にしまわずに、成功を追い求め、自らの力を信じることの私達への警告である。

#### 遠修について

8. 遠修は友人に対する真の忠誠を示している。旧友が恐ろしい虎になってしまっても、その姿を見ずに、友人を助けてことができる。詩を世に出すこと、その家族を助けることを約束した。これは本当の友情である。

9. 両名とも同じ特徴を持っている。遠修は李徴がトラであることを理解できたので、同類だ。
10. 遠修は各人が人生において背負う責任を象徴している。職務のために、彼は人食い虎の恐怖にひるむことなく旅を続けようとした。彼は李徴の友人としての責任を感じて李徴の頼みを果たそうとする。何年も李徴は自分の願望の追及のために、旧友の遠修を無視した。これは彼が父そして夫としての責任をいかに怠っていたかと同じことである。遠修の高い官位が、自分の義務と本分を守り、正しく果たせば、人はどれほど向上できるかを示している。
11. 遠修も李徴と同様、賢明である。遠修が李徴に物語の終わりで、人生の大切なものを示し、李徴がしたことが過ちだったことを示しているところが好きだ。
12. とても忠実で、リーダーにふさわしい。旧友の虎に変わった現状を決してあざけることなく、李徴が人間であれば与えられたであろう敬意を示すことを怠らない。彼は李徴のトラの姿を見ずに、内面を見てくれる。これは友人である李徴とは正反対である。筆者はそれぞれの生き方の結果、利己主義が孤独を生む、謙遜が成功を生むことを示すために、この対比を使っている。
13. とても勇敢で誠実な人だ。彼の勇敢さが報われた。彼は李徴の願いを尊重し、応じている、また李徴を軽んじることなく、むしろ彼を理解しようと努力し、願いにも応じているので彼はとても思いやりのある人だ。彼の性格は私たちが自らの夢を追い求めるなら、私たちが見習うべきお手本である。

## エンディングについて

14. エンディングは悲しい。李徴の個性が、どんなにひどいものであっても、彼を李徴その人にしてのだから、自らに潜む獣に打ち勝つことができないようだ。李徴がやり直すチャンスはあったのに、人生を変えるにはあまりに時間がかかりすぎたので、自らの宿命から逃れられないことをエンディングは示している。彼は人としてふさわしくない、またその才能に値しないので、のろわれて人間性を失った。
15. 虎が月に向かって吼えるので、エンディングはとても象徴的だ。
16. ハッピーエンドと異なり、人に戻ることはない結末が好きだ。この結末により読者は人として行ったこととやり残したことに後悔する李徴に感情移入できる。李徴が人間に戻ってしまっていたら、この物語は同じ衝撃を読者に与えられなかっただろう。この結末が読者に李徴はその後どうなったかを思い巡らす余地を与えてくれる。彼は完全に人間性を失ったのか。永遠に虎の体に閉じ込められたままなのか。読者自身が結論を出すことができ、疑問の余地のない終わり方よりも、この作品をより楽しめる。
17. 物語全体が見事に描かれている。エンディングはふさわしいものであり、すばらしい。最後の数行が月が象徴するものの意味を解く鍵となっていると思う。
18. 李徴には人間としての死を迎える機会が必要で、罪を悔い改める力が必要だ。彼は次第に人間に戻れなくなっている。このことは彼の魂が消失することを意味している。李徴は人として一度も満足できなかった、なぜなら人生で、物事に適切な優先順位をつけることができなかった。家族と引き換えに、彼は成功を得ようと努力した。人間性と引き換えに、彼は勝利によってもたらされるプライドと傲慢さを切望した。虎として彼は物質世界から自らを切り離せることができる。本能によってのみ生きることで、彼れは終わりのない戦いから脱し、今度は心の平安を得られる。
19. 素晴らしいエンディングだ。李徴の妻と子供のことを知りたくなるだろうが、このエンディングはその後に起きたすべてについて得心がいく。

## 月について

20. 月は神を表す。李徴が月に向かってほえるとき、彼は虎に変えた神を呪っている。月はまた李徴が理想とする

才能を表す。彼が吼えて、生き物たちを脅かさせるときも、月はその美しさ(才能)を際立たせている。

21. 月は李徴のモチベーションを示す。月がかげるとき、彼の人格も消えていく。
22. 月は李徴の残された人間としての意識を示している。彼が月に向かって絶望して吼えるとき、彼は自分が人間の体を失ってしまい、人間としての意識を失い始めていることを悲嘆している。吼えることで人間としての意識に戻ることを求めている。二人の運命的な再会の間は、彼がわずかな時間だけ人間の意識を保てると言っているように、残月を見ることができる。李徴が去るときには、月はその輝きを失っているように、李徴の人間性はすでに薄れ、動物の本能が呼びさまされている。
23. はっきりは言えないが、月は人間性を象徴しているのではないか
24. 月は李徴のモチベーションを指す。月がかげるとき、彼のモチベーションも消える。
25. 月は過去の先祖の魂を示す。李徴が吼えるとき、先祖に呼びかけている。相応の不幸を受け入れつつも、運命が変わることを祈っている。月の中で虎の姿の彼と人間の姿の彼が 1 つになれる。月の中で彼の周りの世界は消えうせ、李徴の魂が顕になる。
26. 月は人生の乗り越えるべき障害をさす。遠惨のように、月は人を導き、強くする。しかし、李徴のように、月は苦難と挫折感を示す。月はまた、窮地にある時に、人が頼るより高次の存在だ。

## 疑問点

27. この物語は完結したのか。李徴はどうなったのか。彼の詩は出版され、家族は救われたか。
28. この物語のタイトルはなぜ “The Moon over the Mountain”なのか。山は何を示すのか。
29. 虎になったときの描写は簡潔であるが、どのように、そしてどうして李徴は虎になったのか。
30. 李朝の家族はどうなったのか。きっと、経済的に困窮し、母親の実家か李徴の親戚に頼ったのか。
31. 遠惨は李徴の頼みを実行したのか。面倒でそれを無視したのか。
32. なぜ李徴は虎の姿を身にまとったのか。李徴は虎になる定めを負うほどのことをしたのか。彼は至高を求めた。家族のため、職に就き最大の努力したように思える。おそらく利己心が彼の生きるすべを奪った。彼は別の生き方のチャンスを与えられるに相応しくないのか。

## 旭丘高校の生徒 32名

注・今回は講座現代文-I 応用F G Hの生徒たちの感想をもとに作成。

- ・単元に入る前に生徒に自由に書かせた感想文を、教諭（細田）が項目別に分けたもの。
- ・すべての生徒が最低1箇条は載るようにしている。
- ・交流時には、本校生徒はこの単元を終えている。
- ・このプリントは、単元終了時に生徒に名前入りで配布していた。HIESの生徒は前もって見ていない。

### 【虎について】

- 1 「理由も分からずに～さだめだ」ということばがあるが、私はこの中に「虎」という動物の真の悲しさや哀れみを感じた。
- 2 虎という強さを象徴する動物と、その中にある不安や焦りを感じる人間との対比が印象的だった。プライドがあっても実は弱さも持っていることを示すための設定ではないかと考えた。
- 3 多くの動物は虎を恐れ、近寄ろうとはしない。李徴の「だれ一人おれの気持ちをはかってくれる者はない」という孤独な言葉が深く印象に残った。

【李徴について】

- 4 李徴のように誰でも自分を守るように臆病な部分を隠しがちだが、それを恐れることなく、恥ずかしがることなく、自分の才能を専一に磨いていくことが大事なのだと思う。
- 5 人間は一人ひとりに与えられた役割をしっかりとこなしていくことと、相手を思いやる気持ちを大切に生きていかなければならない。
- 6 人間は理性で行動を制御できる。理性は社会でたくさんの人々と関わることで発達していくと思う。
- 7 作者は失ってから気づく幸せがあるということを伝えようとしていると思った。
- 8 今の自分でいられる時に、今できることを精一杯やって、悔いの残らない生き方をしようと思った。
- 9 臆病な自尊心と尊大な羞恥心とは、自分にもあると感じた。
- 10 自分にはそれができない、という事実を見るのがいやで、何もしないで終わることがしばしばある。自分の殻に閉じこもらずに、挑戦して自分を磨くことを忘れないようにしたい。
- 11 人間は自分を見つめて改めることも必要だ。しかし、人間に戻ってやり直すことができないのが、この話の悲しいところだ。
- 12 袁儻に躍りかかろうとしたところで人間の心を取り戻したのは、李徴にとって袁儻が本当に大切な人だったからではないか。
- 13 虎になってから人間らしさや努力の大切さを悟った李徴を哀れに感じた。
- 14 悔いても過去は変えられない。だから、後悔しないように生きようということを伝えたかった作品ではないか。
- 15 自尊心を持ちすぎず、その道の先達に教えを請うことも必要だと思った。
- 16 自分の弱い心に負けない精神力が必要なことを学んだ。
- 17 この物語の主題は、人間のプライドと弱さだ。
- 18 人間はなぜこうなったのか、この状況を変えるにはどうすればよいのかを自分の頭でよく考えるということをおぼれていると思った。
- 19 虎になって初めて自分を磨いていかなければならないことに気付くというのは、とんでもなく皮肉な話だ。作者が執筆活動をする中で気付いたことなのか。
- 20 (一般に) 罪を犯した人たちは、自分の中の怒りであったり、嫉妬であったりという猛獣を、飼育慣らすことができなかつたためであろう。
- 21 大切なことに気づけないまま生涯を閉じるより、それに気づけたということは、虎になってよかったのかも知れない。
- 22 運命を受け入れようとしている李徴はすごい。自分なら怖くて耐えられない。
- 23 李徴は何の努力もせずにはいたわけではない。また、家族や親友がいたり、孤独であったわけでもないのだから、虎になってしまうのはあんまりだと思った。
- 24 李徴の悲観的すぎる人生観に胸がしめつけられた。
- 25 虎になることで彼自身、反省すべき部分や悔やむべき部分が見えてきたのだろう。
- 26 自分の悲しい運命をありのままに伝えるということは、私には到底できないだろう。
- 27 才能を十分に生かしきれなかつた後悔が伝わってきて、それが興味深かつた。
- 28 李徴は虎になることによって人との交わり大切さに気づき、妻子への思いも再確認できたのではないか。
- 29 李徴の運命は決して悲しいものではない。神様は乗り越えられない試練は与えない。虎として前向きにたくましく生きていく李徴の姿を、私は見てみたい。
- 30 李徴が虎になってしまったのは、自分自身の願望だったのではないか。自分を破壊したいという暴力性の表れがそうさせたと思う。

- 31 袁儔と出会い、語ることで、人として生きることにあきらめがついたのではないか。
- 32 李徴は自分勝手過ぎる。妻子を困窮させ、自分が発狂した後には、その面倒を袁儔に頼む。そして、自分はどこかに消えて行く。
- 33 李徴の姿は、夢を持っても成功できず、辛い生活を送っている人々や、どんなに優れた才能を持っていても、世間に知られることもなく亡くなっていった人々がいたことを表しているように思えた。
- 34 李徴は虎に変えられて結果的にはよかったのではないか。人を思いやる気持ちや、自分の行いを反省する素直な心が生じた。
- 35 「醜悪な姿になってしまった」と言っているが、もし虎になっていなかったら、人としての心の方がどんどん醜悪になっていったのではないか。
- 36 李徴の即興の漢詩について何の言及もないのはそっけないと思った。
- 37 最期に咆哮したのは、袁儔への感謝を言っているように思えた。

#### 【袁儔について】

- 38 二人の間の友情は素晴らしいものであり、互いに信頼し合っているのだと思った。
- 39 自分の行いのせいで虎になったということを人に告げるには相当の勇気が必要だ。袁儔との信頼関係がそうさせたのだろう。
- 40 李徴をどうしてやることもできない袁儔もかわいそうだと思った。その上、世間には死んだと言わなければならない。
- 41 袁儔は昔から李徴の「尊大な羞恥心」を、「猛獣」のような性情だと思っていた。だから、李徴が外見まで虎になったことを、何も不思議に思わなかったのではないかと考えた。

#### 【第一流の作品となるには、どこか欠けるところがあるのではないか。】

- 42 私はこれはおそらく李徴の臆病な自尊心と尊大な羞恥心が生み出した「情愛」の欠如だと思う。
- 43 袁儔がそれを口にしなかったのは、李徴のプライドを傷つけたくなかったからではないかと思う。

#### 【表現】

- 44 李徴が袁儔に向かって長々と語る部分にカギ括弧が付いていないのがおもしろいと思った。
- 45 最初李徴は自分のことを「自分」と言っていたが、途中から「おれ」になっている。少し堅い口調の文から話しことばへの切り替えが、とても自然だと感じた。
- 46 「残月の光」から「白く光を失った月」は時間の経過を表し、その間李徴には袁儔と話しているうちに、人間的一面を取り戻すという変化が生じている。

#### 【その他】

- 47 その後の李徴は読み手が自由に想像できるように書かれているが、私は李徴は人間の心をなくす前に、自ら命を絶ってしまったのではないかと思う。姿は虎でも、心は人であるまま死んでいったのではないかと思った。
- 48 大切なことに気づいた李徴を、私はできることなら人間の姿に戻してやりたと思った。
- 49 これから李徴には虎として幸せに生きて行って欲しい。
- 50 こんな思いをした李徴は、人間に戻ったら自分の能力を十分に発揮し、すばらしい役人になれるだろう。人間に戻って活躍して欲しいと思った。
- 51 李徴は神様に人間として認めてもらい、再び人間に戻ることができたのではないかと推測した。
- 52 人間の心を取り戻すことができたのだから、いつかまた人間に戻れる日がくるのではないかと思った。
- 53 ありきたりな内容であるこの小説が、なぜ教科書にも載るほどの有名な作品になったのか。